（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　大久保遼

大久保遼氏の博士学位申請論文「映像のアルケオロジー　19 世紀転換期における視覚理論・光学装置・映像文化」は、これまで個別に論じられてきた 19 世紀転換期における視覚メディア（幻燈、報道写真、初期映画）を、それをとりまく言説と受容実践の展開に照準しつつ、実証的な歴史分析によって、近代日本における視覚・光学メディアの持つ社会的・文化的・歴史的意味を総合的に問い返す論考である。最終的には、視覚・光学メディアの近代日本における言説化・受容実践の特徴・特異性を、光学的な視覚性と近代的な視覚性、そして日本の歴史的文脈に固有な、ヴァナキュラーな身体感覚との重層的な連関のあり方を「三つ巴」のシステムとして位置付けている。光学装置や視覚的な現象をめぐる言説（科学的理論など）の産出、光学・視覚装置の生成、およびメディアの受容の実践（適合的な身体性の涵養）とが相互に連動しつつ歴史的に展開した西洋近代に対して、日本ではその三者は微妙な齟齬をきたしながら、日本固有の文脈に節合されていった。西洋的なメディア史の見取り図を日本の近代メディア史に適用してしまうのではなく、日本近代に特異に見られる受容史の文脈を実証的・理論的にあきらかにしようとする論文である。

第一章ではまず 18 世紀日本における光学装置と視覚理論の伝来・受容をテーマとしている。マジックランタンの導入期においてすでに、外部対象を構成的に観察する認識論的な「眼」の機制に着目する視覚理論は一部の蘭学者たちに受け入れられていたが、光学装置そのものは「写し絵」として日本の見世物、寄席のような大衆芸能スタイルのなかで（殊更に「視覚的」側面に限定されない形で）受け入れられていた。視覚理論と光学装置、受容実践との有機的な連関はいまだみられていなかった時期である。

続いて第二章では、明治初頭における幻燈の流行に着目し、それが写し絵とは異なる水準で存在していたことが明らかにされる。幻燈は 1880 年代に、人びとの視覚を合理的に馴致する教育装置として明治政府の教育システムに取り込まれていくが、それと同時期に物理学と生理学に準拠した視覚理論が導入される。視覚が人びとの日常的な身体感覚を統制していくうえで重要な契機として認識され、身体馴致の実践が生み出されていったこの時期の言説と装置、実践との連関が様々な歴史資料を駆使して明らかにされている。

第三章では、1888 年に起きた磐梯山噴火の映像の流通が、主として幻燈にそくして事実報道の成立と視覚文化の変容のプロセスのなかで分析される。幻燈は、「事実に関する情報を希求する」という新奇な装置であるとともに、江戸期以来の見世物的な身体性を喚起する媒体としても位置づけられ、日本近代視覚メディアに独特の両義性を示しているという点が、示される。

第四章は、教育幻燈会のような視覚統制のあり方とは異なる、19 世紀末日本における幻燈の受容史の展開が記述される。1890 年代には、教育幻燈会とは異なり、視覚に限定されない多感覚的な刺激を観客に喚起する幻燈の実践が模索される。その最も顕著な例が日清戦争時各地で開催された戦争幻燈会である。大久保氏は、三章、四章において、西洋近代由来の幻燈という視覚装置が、視覚に限定されない全身体性に働きかける「大衆芸能」的な文脈と節合していく歴史的プロ

セスを精細に記述しているといえよう。

第五章では 1890 年代以降の知覚をめぐる科学的言説（感覚理論）のインパクトが、それ以前の視覚をめぐる言説との差異に照準して分析される。1890 年代前後の実験心理学が着目した感覚は、五感への刺激に依り偶発的に生じ、神経系のネットワークのなかを流動する不確実な存在であり、その不確実性に抗う契機としての「注意」が焦点化されていく。実物教授とは異なる新たなタイプの身体統制の方法と理論が実定化されていったというわけである。

第六章は 1910 年代に流行した連鎖劇とキネオラマがとりあげられ、20 世紀初頭の映像をめぐる言説・装置・実践のあり方が、19 世紀末の構図との対照において示される。

以上のように、本論文は、19 世紀末という時期に照準しつつ、視覚をめぐる言説、装置、受容実践の三者の重層的な絡み合いを歴史的・社会的水準において明らかにし、19 世紀末日本における視覚という社会的・文化的制度の「転換」の様相を描き出している。近代芸術研究者ジョナサン・クレーリーらの視覚文化史などの枠組みを日本近代に直接適用するのではなく、西洋近代における視覚の中心化の過程と、日本におけるそれとの異同を実証的に描き出し、それを理論的な水準において社会学的に考察した本稿の研究の方向性はきわめて独創的かつ学術的に重要なものであり、またそうした企図を十分に果たしたといえる実証的精度を認めることができる。

社会学的水準、文化研究的水準、視覚文化論的水準のいずれにおいても、野心的・独創的な準拠問題を設定し、それを十分な実証的、理論的深度をもって対応した本論文は、高く評価しうるものである。審査委員からは、結論として提示されている「三つ巴」における三者の意味連関についての説明がやや不足している点、19 世紀末に転換期を見る歴史解釈の妥当性、ベンヤミンの言う「ファンタスゴマリー」との連関がみえにくい点など、いくつか疑問点が提示されたものの、高度な実証性と理論的整合性を持つ本論文の持つ意義については全員が高い意義を認め、博士学位論文として十分な水準に到達しており合格との判断が相応しいと合意した。以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。